鞍馬山博物館

鞍馬山霊宝殿

樹洞より外をのぞくムササビ（山中 晋 撮影）

信仰と自然科学と人文科学の総合博物館

3階　仏像奉安室
2階　寺宝展観室
　　與謝野記念室
1階　鞍馬山自然科学博物苑展示室
別棟　冬柏亭（與謝野晶子先生書斎）

鞍馬山自然科学博物苑

——自然に感謝しましょう——

鞍馬山は、山全体が大自然の宝庫です。大きな宇宙の力（鞍馬山では「尊天」と称します）を頂いて植物、鳥獣、昆虫、陸貝、きのこ、岩石などの多くのいのちが安らいでいます。森羅万象さまざまな営みは宇宙の力のお働きであり、多様ないのちのありようこそ、その顕現に他なりません。自然界の万物はそれぞれが天から授かったかけがえのない宝物であり、いろんなことを教える先生でもあります。

人間を初めすべてのいのちが心身共に清められ安らぐことのできる山内全域を、鞍馬山では鞍馬山自然科学博物苑と名付け、自然への感謝の心と共に、後世にきっちり伝えたいと努めています。

身も心も姿勢を低くして自然の相（すがた）とじっくりと向き合う時、その奥にある共に生かされているいのちを実感し、さまざまないのちに支えられている自分に気づきます。一輪の花、一匹の虫に時空を超えた宇宙の働きを観る……鞍馬山はそのための道場です。

霊宝殿公開時間

午前9時～午後4時

（火曜日休み。火曜日が休日のときは翌日休館。
12月12日～2月末日。その他臨時に休むことあり。）

交　通

出町柳より　叡山電車鞍馬行に乗車（約30分）すぐ仁王門
仁王門より　ケーブル（約2分）と徒歩約550m

鞍馬山博物館　鞍馬山霊宝殿
京都市左京区鞍馬本町1074
鞍馬弘教総本山鞍馬寺内
電話（075）741-2003（鞍馬寺）　〒601-1111

1階 自然科学博物苑展示室

——鞍馬山の自然の相（すがた）を展示しています——

鳥獣コーナー

春～夏には、**ウソ・ヤブサメ・オオルリ・キビタキ**など、秋～冬には、**シロハラ・アオジ・ルリビタキ**などの渡り鳥や、**ヒヨドリ・メジロ・カケス**など年中見られる種類を含めると、100種類の野鳥が確認されています。また、夜になると、参道の木立の間を**ムササビ**が飛び交い、**キツネ**や**タヌキ**が姿を現わし、秋には**シカ**の鳴き声が聞こえ、時には**リス**や**テン**なども現われます。

岩石コーナー

鞍馬山の大部分は**グリーンストーン**や**石灰岩**で、約2億5～6千万年前のもので、赤道付近から年に3～4cmの速さのプレートに乗り、1億数千万年かけて移動して来ました。岩石で一番新しく出来たものは**火成岩**で約7千万年前で、次に**堆積岩**、最も古いものはグリーンストーンや石灰岩です。

きのこコーナー

きのこ（菌類）は、植物や動物などが残した有機物を分解し、無機物に還元するといった大切な役割を自然界において果たしています。山内の地表には**アカモミタケ**や**テングタケ**の仲間など、倒木や枯れ木には、**サルノコシカケ**の仲間や**ニガグリタケ**などが生えています。

昆虫コーナー

蝶の仲間は、**カラスアゲハ**や**スミナガシ・テングチョウ**など74種類、蛾の仲間は、**ヤママユガ**や**フクラスズメ**など約800種類が確認され、**カブトムシ・ヒメカマキリ・ヒゲコメツキ、トゲナナフシ・カネタタキ・ミンミンゼミ・ヒグラシ**など、多数の昆虫が生息しています。

陸貝コーナー

石灰岩が多い地質、**モミ**や**カシ**などの大木が生える山内は、陸貝が生息するには好条件で、**ニシキマイマイ・クチベニマイマイ・オオケマイマイ・ヤマタカマイマイ・ナミギセル**など約50種類が確認されていますが、そのほとんどが3㎜～10㎜位の大きさの小さな貝です。

植物コーナー

山内には、**カゴノキ・ツバキ・ウラジロガシ**などの常緑樹、**ケヤキ・カエデ類・シデ類**などの落葉樹、**モミ・ツガ・スギ**などの針葉樹など暖帯性と温帯性の植物が入り混じり、僧正ガ谷～奥の院にかけては、**アラカシ・ツバキ・カゴノキ**などの極相林が見られます。また、1971年～1981年の調査では、1062種類が確認されました。

（'24.3.1現在）

二階　仏像奉安室

平安時代後期

国　宝　木彫毘沙門天立像
　　木彫吉祥天立像
　　木彫善膩師童子立像

毘沙門天は、梵名をバイスラバナとよび、仏法を守護する護法神・護世神であり、四天王の一尊として特に北方を守護し、多聞天ともよばれます。また、福徳財宝を司る施財神としても尊崇を集め、七福神の中にも加えられています。我が国における毘沙門天に対する信仰は特に平安時代より盛んとなりました。

橡（とち）の木で彫られたこの像は、小手をかざしてはるか彼方を俯瞰する姿が鞍馬寺独特であり、北方より平安京を守護する働きをあらわしており、十一世紀の作と思われます。

吉祥天は、毘沙門天の后です。この吉祥天像は毘沙門天の脇士として、やや俯視がちでひかえめながら慈悲あふれる女性の御姿に彫られています。毘沙門天とその左側の脇士善膩師童子像が橡（とち）であるのに、この像は桧（ひのき）を素材としています。

明治三十七年の修理の時に、大治二年（一一二七）の年記の入った般若心経と五種香の納入品が胎内から見出されました。その前年の鞍馬山の二度目の火災の時、毘沙門天と善膩師童子像は救われたが吉祥天像は焼失したため、大治二年に新しく彫られたのだろうと言われています。

善膩師童子は、毘沙門天の五人の太子の一人です。この像は、毘沙門天の脇士として彫られたもので、つぶらな目、ふくよかな頬に、その童子らしさが表わされています。

右手は接がれていますが、左手を始めその上の宝篋にいたるまで一木で彫られています。素材は毘沙門天と同じ橡（とち）で、毘沙門天像とこの像は同じ時期の作と考えられます。

重要文化財　木彫鎮将夜叉（兜跋）毘沙門天立像　　平安時代後期

一般に兜跋（とばつ）毘沙門天とよばれているこの形の像は、尼藍婆・毘藍婆とよぶ二鬼をしたがえた女神の両手の上に立っているのが特徴で、兜をかぶり、威厳を持っていますが、この像の憤怒の相は、内部に秘めた力強さとたくましさをよく表わしています。

「唐の天宝元年（七四二）天山南路の守護に当たっていた安西都護府が外敵に襲われて危険にさらされたおり、安西城の北門の楼上に兜跋毘沙門天が出現し、敵を追いちらした」という伝説があり、それ以後、城の楼門上にこの毘沙門天を安置することが流行したといわれます。一木造りのこの像もまた、十一世紀平安時代後期の作です。

重要文化財　木彫聖観音菩薩立像　嘉禄二年二月（一二二六）銘　鎌倉時代

鎌倉時代は、写実性の高い仏像が多く作られました。やや細作りのこの聖観音像は美しい女性を想わせ、蓮を持つ左手と、それにそわした右手のしぐさには、優美な柔らかさがあります。枘（ほぞ）にある銘より、肥後の別当であった定慶の作と知れます。定慶は慶派に属し、十三世紀の前半から中期にかけて、中国宋時代の手法を取り入れ独自の境地をひらいた異色の仏匠です。この像の憂いを含んだ中国の美女を思わせる風情は多くの人を魅きつけているようです。

木彫毘沙門天立像　三軀　　鎌倉時代

寸法も形も似かよったこの三軀の毘沙門天像は、片手に鉾を執り片手で腰を押す形で、「鞍馬様の毘沙門天」と呼ばれ、鞍馬の毘沙門天を代表するお姿で、「毘沙門天和讃」にもうたわれております。経塚遺物の懸仏群にも同形のものが多く見うけられることから、経塚を守り、平安中期以降に鞍馬山でも盛んになってきた念仏の行者を守る、来世への信仰の守護神としてのお姿であろうと考えられます。

鞍馬山神木　大杉大権現（魔王尊影向の杉）

鞍馬山の奥の院は、いまから六百五十万年もの昔、金星から魔王尊が降臨されたと言われている霊域です。鞍馬寺の開祖である鑑禎上人も、峯延上人も、また義経をはじめ多くの修行者が今もって霊験をさずかるのは、この山深い場所なのです。特にここにある古木の大杉を神木とし「大杉権現」の名で信仰する人々がたくさんいます。樹齢は千年というのですが、昭和二十五年の台風で中ほどから折れてしまいました。そこで、この神木を素材にして光明心殿の魔王尊像と宝殿の三尊尊天像が新しく彫られ、霊宝殿では、折れた枝の部分を大杉権現としておまつりしております。（その後、昭和四十年の台風で地上から十メートルを残して大破した「大杉権現」は平成三十年の台風で倒壊しました。そのことを「大悲代受苦」の相、「生住異滅」という真理を身をもってお示しくださる相といただいております）

二階　寺宝展観室

千二百余年の歴史を誇る鞍馬寺には、さまざまな什宝類が伝えられており、テーマを定めてそれらを順次紹介しています。自然が天から頂いた宝物であるなら、什宝類は匠の技と信仰心が紡ぎ出した宝物です。ものの奥に秘められたいのちとこころをご覧いただきたいと希っています。

二階　與謝野記念室

與謝野晶子先生の書斎「冬柏亭」が門弟岩野喜久代氏のご好意によって鞍馬寺に寄進されたさい、岩野氏所蔵の寛・晶子両先生遺品（文箱・机・歌稿・書籍など、ご子息與謝野光氏より贈られたものを含む）も共に寄進されました。その後同門の諸氏より寄進されたものや香雲初代管長が同門であったよしみから鞍馬寺に残されていた関係資料なども本館内に収蔵し保存に努めています。展示を通して、両先生についていろいろご理解いただきたいと思います。

與謝野晶子先生と鞍馬

信樂香雲初代管長は晶子先生の直弟子であったことから、お二人は大正期から交流があったようです。そのため晶子先生は寛先生と共に幾度も鞍馬を訪れて多くの歌をのこしておられます。また、霊宝殿前には両先生の歌碑があり、広く親しまれています。

雲珠桜錦を着つつ愁ふれどなほ
御佛を頼みてぞ立つ　（晶子）

別棟　冬柏亭（與謝野晶子先生書斎）

與謝野家は、昭和二年に、当時の東京市外荻窪村（杉並区荻窪二ノ一一九）へ、その居を移しました。広い屋敷の中には「采花荘」と呼ぶ日本屋と、「遥青書屋」という大きな洋館がありました。この二つの建物の間に「冬柏亭」と呼ばれる書斎が、晶子先生の生誕五十年のお祝い（昭和四年十二月）に、お弟子さんたちから贈られ、昭和五年三月に完成しました。

晶子先生の没後、昭和十八年十月に、冬柏亭は門下生の岩野喜久代氏によって、大磯にある氏の住居へ移されました。

それが岩野氏のご好意から、さらに鞍馬山に移築されたのは昭和五十一年四月のことで、同門の信樂香雲初代管長とのご縁によるものです。